

細川正義先生の『退任記念号』発刊に寄せて

細川正義先生は、二〇一七年三月三十一日をもちまして、ご定年による関西学院大学文学部教授退任の日をお迎えになります。先生はどんな時も常に私達を暖かく見守り、慈しみ深くお導きくださいました。ここに長年にわたる先生のお働きに感謝と敬愛の念をこめて、本誌『日本文藝研究』第六八巻特別号を編み、お捧げしたいと思います。

先生は、一九七二年に関西学院大学文学部日本文学科をご卒業になり、同年関西学院大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程にご入学、一九七四年三月に同前期課程を修了なさり、文学修士を授与されました。修士論文は「芥川文芸の世界」と題された芥川龍之介の作品研究でした。引き続き同後期課程にご進学、一九七七年に単位取得満期退学をなさいました。後期課程在学中の一九七六年四月には九州女学院短期大学の専任講師として赴任なさり、助教授、教授として十四年間のお勤めの後、一九九〇年に母校である本学文学部に助教授として迎えられました。爾来、助教授、教授として、また文学研究科前期課程指導教授、後期課程指導教授として二十七年にわたり学生、後進のご指導に尽瘁なさいました。

先生のご研究は、修士論文の題目がそうであるように、芥川龍之介の作品研究から始まりました。後期課程進学後、芥川作品についての三本のご論考を発表なさいますが、芥川の「新生」の主人公ほど

老獪な偽善者に会ったことはなかった」(『或阿呆の一生』)という言葉を起点に島崎藤村の文学世界に関心をお持ちになり、一九七五年に「藤村『破戒』の世界」(『日本文藝研究』第二七巻一号)を発表なさいます。以降、藤村の諸作品、人となりについて、様々な方面から弛まぬご研究を続けられてきました。そして一連の藤村作品研究をお纏めになり、二〇一三年八月『島崎藤村文芸研究』を上梓なさり、この著作によって、二〇一五年二月に関西学院大学から「博士(文学)」学位を授けられました。先生は、しかし、芥川龍之介、島崎藤村にとどまらず、広く近現代の散文作品、児童文学作品にも目を向けられ、精力的に研究をなさってきました。その眼差しの基底にはキリスト教信仰があったようにお見受けします。ご研究生活のごく初期から「日本キリスト教文学会」にご所属になり、そこでもご活躍なさっていますが、数多くのご業績のなかに「救い」「祈り」などの視点を見出すことができます。自らも敬虔なクリスチャンとして、どんなに忙しくても日曜礼拝を続けていらつしやいました。

教育者としても非常に多くの学生達に慕われ、指導をなさってきました。これには多言は不要でしょう。また、斯界で活躍する多くの後進をお育てになりました。多くの学生の口から、先生の暖かさ、熱心さ、優しさをよく聞きます。先生は常に学生に寄り添って一緒に歩もうとなさって来たように思えます。ご多忙の中時間をやりくりして学生のゼミ旅行に必ず付き合っていらつしやるなど、学生との交歓に時間を厭わなかったのもその延長だったのでしょう。それは実は先生のご研究においても同じで、作中人物やその描写、言葉に寄り添って、そこから離れることなく研究をお進めになっていらつしやったように思われるのです。この寄り添う力、寄り添う眼差しこそが、少なくとも私には細川先生の細川先生たる所以でしたし、ご信仰の力だったと思います。そういうえば、学内でお就職になった副学長や学生

部長などの様々な要職にあっても、やはり先生はいつも学生たちに寄り添うようにお仕事をなさってき
たように思われます。実際に様々な施策を議論する場でまず学生達を思い遣る言葉を私は何度か耳にし
ました。

ご定年後は少しゆっくりお休みになつて、ご自身のために過ごしたいとは思いますが、しか
し、先生にとってはご自身のために時間を使うことは、すなわち他の人々に寄り添うことにほかならな
いのでしょうか。どうかこれからもいつまでもご壮健でいらつしやいますよう、ご健筆をお揮いになられ
ますよう、心より祈念申し上げます。

二〇一七年二月十五日

関西学院大学日本文学会会長

大 鹿 薫 久